

熟練内包的労働の一般概念

— オブジェクトとしての労働 —

小幡 道昭

はじめに

本稿の目的は、資本主義のもとでは熟練の解体が進み単純労働が支配的になるという「単純労働化論」や、純粹な資本主義ではとりあえず熟練を捨象し単純労働のみを想定すればよいという「単純労働仮説」に対して、均一性を具えた労働は熟練の発展を通じて多態的に現前するという反対命題を定立することにある。

一生かけて磨き上げるような職人技が資本主義のもとで衰退したのはたしかだが、今日の労働が『資本論』に登場する工場労働より単純になったとも思えない。現代の熟練は、資本主義の発生期における手工業的熟練とも、19世紀イギリス綿工業における熟練とも、20世紀のフォード型生産システムにおける熟練とも違う態様で存続しているということもできそうだ。熟練は、衰退しているようにも深化しているようにもみえる不思議な相貌をしている。

ところが、その魅力に惹かれて問題の内部に一步足を踏み入れるとたちまち大混乱に陥る。従来の議論では「熟練」も「労働」も、自然言語のなかに埋没しており、明確な概念が欠落しているためである。このことは『資本論』冒頭の商品論を想起すれば一目瞭然、「熟練」には「価値」に匹敵する抽象レベルの考察がほとんどみられない。明確な用語の定義ぬきに、いかに厳密な推論を繰り返しても、議論は空回りするだけである。

以下、第1節で『資本論』の「剰余価値論」の表層に現れた熟練論を分析し、第2節で「労働過程論」に埋設された熟練論を掘り起こし、両者を貫く、単純労働に外部から熟練が生産・付加されるという「熟練＝外付け説」を棄却する。第3節ではこれに換え、熟練内包的な労働概念を基礎に「熟練＝型づけ説」を組み立てることで、熟練を通じて労働の均一性は知覚できる世界に立ち現れるという反対命題を論証する。

1 剰余価値論と熟練

■剰余価値論の基本命題 現行『資本論』第1巻をみると、熟練の問題は前半体系の脊梁をなす剰余価値論の展開にそって点々と現れる。ここで剰余価値論とよぶのは、

- I: 商品価値の大きさはその生産に要した労働量で定まる（投下労働価値説）
- II: 同じ規定が労働力商品にもそのまま適用される（労働力の価値規定）
- III: 価値どおりの交換に基づいて剰余価値が必然的に発生する（搾取論）

という三つの命題で構成された理論である。この理論には、利潤は不等価交換で発生するのであり、等価交換のルールが守られれば搾取のない自由な市場経済が実現できるというブルードン型の市場社会主義を根本から覆すねらいが籠められていた。これはイデオロギー論争としてはたしかに興味深いものがあるが、理論

的には多くの困難を抱え込むことにつながった。

最大の難点は、労働力に生産概念を適用した命題Ⅱにある。一般商品も労働力商品も同じ等価交換のルールにしたがいながら、資本のもとに剰余価値が必然的に形成されることを論証したところで、『資本論』は「手品はついに成功した」(Marx[1867] 209)と宣言する。が、これはたしかに手品、だから種も仕掛けもちゃんとある。労働力の生産のところで「生きた労働」の存在を気づかれぬよう隠したのである。このような手品によらずに、剰余価値の理論をどう組立てなおしたらよいかについては別に論じたので(小幡[2016])いまは立ち回らない。ここで確認しておきたいのは、『資本論』の熟練論は当初、この剰余価値論の大きな筋書きを補足する、いわば端役に過ぎなかったという点である。

ところがマルクス没後、状況は一変した。『資本論』の剰余価値論を否定する立場から、この熟練論の曖昧さが糾弾されるようになる。ペーム・バーヴェルク(Böhm-Bawerk[1896])による批判とヒルファーディング(Hilferding[1904])の反批判はよく知られている。この論争はやがて、価値論と整合的な熟練の処理を模索する一連の研究を、マルクス経済学の内部に定着させていった。複雑労働論は、サービス労働や管理労働などを巻き込んで、価値論研究の主役とまではゆかぬが一廉の脇役に昇格した。

しかし、こうした研究で素材とされてきた『資本論』の言説はことごとく、剰余価値論の本質を理解するためには熟練など捨象してよいという、いわば斬られ役への捨てゼリフ、それを拾い集めて、より一般的な価値論に組み込もうとすること自体にどこか無理がある。ここではむしろ、同じ『資本論』の言説を再解釈しながら、斬り捨てられるまえの熟練の正体を解き明かすことに力点をおいてみよう。

■社会的平均的労働と熟練 熟練の問題は、剰余価値論の出発点である命題Ⅰの補論として二度言及されている。「社会的平均労働」と、次項の「単純労働への還元」である。

||A| 諸価値の実体をなす労働は、同等な人間の労働であり、……個人的労働力のそれぞれは、……一商品の生産に平均的に必要な、または社会的に必要な、労働時間だけを必要とする限り、他の労働力と同じ人間の労働力である。社会的に必要な労働時間とは、現存の社会的・標準的な生産諸条件と、労働の熟練 *Geschick* および強度の社会的平均度とをもって、なんらかの使用価値を生産するのに必要な労働時間である。(Marx[1867] 53)

ここで問題にされているのは、同種商品の生産に必要な労働時間が区々なケースである。まったく同じ道具や原料を用いても、なぜ、人によって生産に必要な労働時間がバラつくのか、ここでは「熟練および強度」が違うからだと言いつけられているだけで、それ以上に「熟練」*Geschick* なるものの正体は明かされていない。ただ少し注意して読めば、「熟練」*Geschick* が、労働手段や労働対象に帰着しない、個々の労働主体の属人的な資質のようなものを指しているのがわかる。「ある人が怠惰または不熟練であればあるほど」(Marx[1867] 53)というとき、この人はどこでどのようににはたらいとも「怠惰または不熟練」なのである。

||A|の主旨は、かりに個人的なバラツキがあろうとも、その違いは「社会的平均度」によって規定される「同等な人間の労働」にとってはどうでもよいという点にあり、熟練は捨てる目的で捨てた補足事項にすぎない。ただ、加重平均をとれば、「同等な人間の労働」が「価値の実体」をなすという命題Ⅰは維持できるといって捨てる方には決定的な誤りが含まれている。この点は最後まで読めばわかるはずである。

■複雑労働と単純労働 命題Ⅰを補足する、もう一つ別の言及がある。||A|が同種労働に対するものであったのに対し、異種労働に関する||B|の規定である。

||B| ①裁縫労働と織布労働とは、質的に異なる生産的活動であるにもかかわらず、ともに、人間の脳髄、筋肉、神経、手などの生産的支出であり、こうした意味で、ともに、人間の労働である。それらは、人間の労働を支出する二つの異なった形態にすぎない。②確かに、人間の労働力そのものは、それがあれこれの形態で支出されるためには、多少とも発達して *entwickelt sein* いなければならない。……人間の労働一般は、平均的に、普通の人間ならだれでも、特殊な発達 *Entwicklung* なしに、その肉体のうちにもっている単純な労働力の支出である。……③より複雑な労働は、何乗かされた、あるいはむしろ何倍かされた単純労働としてのみ通用し、その

ために、より小さい分量の複雑労働がより大きい分量の単純労働に等しいことになる。この還元が絶えず行なわれていることは、経験が示している。ある商品はもっとも複雑な労働の生産物であるかもしれないが、その価値は、その商品を単純労働の生産物に等置するのであり、したがって、それ自身、一定分量の単純労働を表わすにすぎない。④さまざまな種類の労働がその度量単位である単純労働に還元されるさまざまな比率は、生産者たちの背後で一つの社会的過程によって確定され、したがって生産者たちにとっては慣習によって与えられるかのように見える scheinen。⑤簡単にするために、以下ではどんな種類の労働力をも直接に単純な労働力とみなすが、それは、還元への労をばぶくためにほかならない。(Marx[1867] 58)

||B|は③の複雑労働の単純労働への還元論でよく知られているが、これは①にみられる、裁縫労働と織布労働のような異種労働間の「形態」転換論の延長線上に登場する点に、まず止目する必要がある。カギとなるのは、両者を媒介する②の「発達」Entwicklung の理解である。このパラグラフには「熟練」という用語は登場しないが、この「発達」は熟練の重要な契機をなす。「発達なき熟練」は「走らぬ名馬」に近い自己撞着となる。||B|の根底には、独自の熟練論が伏在するのである。

読解のポイントは

- [1] 特殊な「発達」をまったく必要としない単純労働が広く実在すると読むべきか、
- [2] 現実には特定の「発達」を遂げた多様な「形態」の労働のみが実在すると読むべきか、

にある。①→②までを読むと、どんな労働も「多少とも発達しなければならぬ」という以上、[2]のように読める。ところが②→③と読み進めると「特殊な発達なし」の単純労働が一般に実在し、特殊な複雑労働1時間は単純労働の x 時間に還元できるとされており、[1]のように読むほかなくなる。事実また、④のように単純労働が「度量単位」だとすれば、「単位」として計測可能な実在性が必須となる。とはいえ、二つの読み方は、解釈で決着をつけるべき問題ではない。ここでは部材として拾っておき、「発達」とは「なに」が「なに」になることなのか、あとで熟練の概念を組み立てるなかで理論的に研磨してみる。

||B|をめぐる議論は、これまで「発達」の正体にふみこむことなく、現象として目につく③にもつばら集中してきた。すでに述べたように、バームバーヴェルクは③を、異なる労働量の価格を通じた還元論だと読み、これでは労働量が価格を決定し、価格が労働量を決定するという循環論法になると批判した。この批判に対するフィルファーディングの反批判は見事だった。ポイントは④の解釈にある。ここではたしかに、還元率は背後の生産過程で「確定」されていると記されている。ただ「背後」の原理は直接には「見えず」、現実には「慣習」によるかのように「見える」というのである。この関係をバームバーヴェルクは誤読していると鋭く指摘したヒルファーディングの反論は解釈論としては正しい。

しかし、解釈として正しいということは、必ずしも解釈した「内容」が正しいことを意味しない。④の解釈だけでは正解に到達できない根因は⑤にある。熟練の正体を突きとめることなく、剰余価値論のために捨象する||B|の大枠が問題なのである。

■労働力の再生産と熟練 上記の箇所からだいぶ間をおいて、今度は剰余価値論の命題IIの補足規定として熟練論が現れる。

||C| 一般的人間的な本性を、それが特定の労働部門における熟練 Geschickと技能 Fertigkeit とに到達し、発達した entwickeln 独特な労働力になるように変化させるためには、特定の養成または教育が必要であり、大なり小なりの額の商品等価物が費用としてかかる。労働力の性格がより複雑なものであるかないかの程度に応じて、その養成費も異なってくる。したがって、この修業費はほんのわずかでしかないとはいえ、労働力の生産のために支出される価値の枠のなかにはいって行く。(Marx[1867] 186)

||C|で目を引くのは、「一般的人間的な本性」なるものが「熟練と技能」に「発達する」という観点である。||B|②の「人間的労働力そのもの」を「一般的人間的な本性」と同義と解釈すれば、これは||B|の①→②の「労働力そのもの」を幹細胞にした異種労働への多態化論にびたりと重なる。ただ||B|では「熟練」とい

う用語がみられないのに対してここではそれが明示されている点が注目される。

これも些細なことだが、**||A|**では「熟練」Geschick が単独で登場したのに対して、ここでは「技能」Fertigkeit と並記されている。理由は示されていないが、この追加は読み手としてごく自然に受け容れられる。もともとGeschick には 与えられたもの to be sent, gift というニュアンスがあり、だから自分の力で変えられない「運命」の意味にもなる。教え学ぶようなものではない。これに対して Fertigkeit の fertig は徒競走の「ヨーイ、ドン」の「用意」であり、特定の労働をおこなうための準備、訓練によって獲得できる技能である。この点で、「養成または教育」への言及と同時に、ここでFertigkeit が追加されたことには必然性が感じられる。ただ『資本論』のテキストでは、Geschick と Fertigkeit はただ並置されているだけである。これも過剰な解釈は慎み、ここでは部材として蒐集し、あとで理論的に検討しよう。

■搾取と複雑労働 『資本論』は前述の「手品はついに成功した」(Marx[1867] 209)と宣言したあと、「価値増殖過程」でもう一度熟練に言及する。

||D| 社会的平均労働に比べてより高度な、より複雑な労働として意義をもつ労働は、単純な労働力と比べて、より高い養成費がかかり、その生産により多くの労働時間を要し、それゆえより高い価値をもつ労働力の発揮である。もし労働力の価値がより高いならば、それゆえ daher にこそこの労働力はより高度な労働においてみずからを発揮し、それゆえに同じ時間内で比較的高い価値に対象化される。とはいえ、……剰余価値は、労働の量的な超過によってのみ、同じ労働過程の……時間的延長によってのみ生じてくる。(Marx[1867] 212)

||D|の内容は、「資本家によって取得される労働が単純な社会的平均労働であるか、それとも、より複雑な労働、より高い特殊な比重をもつ労働であるかは、価値増殖過程にとってはまったくどうでもよい」(Marx[1867] 212)という結論のもと、論証ぬきの「それゆえ」daher の連続になっている。ただヒルファデーディングが、この箇所こそ、バームパーヴェルクが、そして後にまたペルンシュタインが看過した還元率を確定する「社会的過程」だと主張して以来、— おまけに**||D|**の2番目の「それゆえ」daher が初版から第3版までは「しかし」aber だったのをエンゲルスが第4版で訂正したといったテキストクリティークの問題まで絡み — **||D|**に還元率の決定原理を読みだそうとする複雑労働論争が展開された。

だが、この論争は決定的な誤りを犯してきた。正解があるというドグマにいつまでもこだわりつけてきたのである。この問題は養成労働、いわゆる「教師の労働」が存在するかぎり、— 「学生の労働」が加わればなおさらのこと — 剰余価値論の基本命題に抵触する。問題そのものに欠陥があるのである。

たしかに、熟練の養成には生きた労働など必要ないと仮定すれば困難は解消する。ただその場合は「熟練」といっても、中味は単純労働者が着る「作業着」と同じこと、「偽装された生産手段」にすぎない。作業着を労働者が自分で買って工場にはいろうと、資本家が変わる資本として投下しようと、作業着の価値は他の不変資本と同様、生産物に移転するだけで、新たに「養成された熟練」の話にはならない(小幡[2014])。

■熟練を「生産」する労働 熟練の養成に追加労働が必要だとすると、この生きた労働 $v+m$ に含まれる剰余労働 m をだれが取得するのかという難問が生じる。ディレンマはここに潜む。しかも、この熟練の「生産」に必要な労働は、教える「教師の労働」だけでおわらない。自ら学ぶ「生徒の労働」も考えなくてはならない。養成費で教材本を買っただけでは熟練は身につかない。目的意識的に読んで理解する労働が必要なのである。「教師の労働」にせよ「生徒の労働」にせよ、その m を資本が取得すれば、複雑労働はその分だけ価値以下に売られることになる。逆に、労働者が取得すれば、資本のもとで剰余価値を生まない労働の存在を認めることになる。

さらにさかのぼれば、そもそも熟練の「生産」に生きた労働が必要だとすれば、本体をなす労働力そのものの「生産」にも、生活手段 c だけでなく、生きた労働 $v+m$ が必要だったことになるはずである。複雑労働論は、資本の生産過程の外部で熟練が「生産」されると考えたために、図らずも、労働力の「生産」における生きた労働の不在という手品の種を明るみにだしてしまったのである。

これまでみてきたように、『資本論』の剰余価値論はもともと単純労働をベースに三つの命題によって堅固に構成されていた。これにあとから「たとえ熟練が登場しても剰余価値論の基本原則は崩れることがない」という補論が追加されるかたちになっている。その結果、「労働にとって熟練とはなにか」という基本問題は、答える間もなく斬り捨てられたのである。ただこれは、剰余価値論にかぎれば、という話である。

2 労働過程論と熟練

■『資本論』の労働過程論 「労働過程」は『資本論』のなかで異彩を放つ。ここでは労働が商品価値の脇役としてではなく、主役として登場する。「労働とはそもそもなにか」が、かなり高い抽象度で語られているのである。とはいえこれも、価値論で振られ役ばかり演じてきた使用価値相手の名演技であり、第1巻前半の主題をなす剰余価値論の幕間劇インテルメディア以上のものではない。しかも、労働がはじめて主役を演じるこの場面には、剰余価値論で使用価値と同様、斬られ役を演じてきた熟練のすがたはない。「労働過程」には Geschick という用語も Ferigkeit という用語もでてこない。文面だけから熟練の契機を読みとることは難しい。

しかし、消えた熟練のすがたを追ってみると、いままで気づけなかった『資本論』の「労働過程」の秘密が浮かびあがってくる。ほぼ完璧に思えた「労働過程」の労働概念は、紙一重のところまで熟練の契機を切除し、結果的に「労働の本質は単純労働にある」というドグマを育む遠因だったことに気づく。どういうことか、テキストを批判的に検討してみよう。

■「労働そのもの」 問題の核心は次の一節にある。概念を抽出するために、保留や例解はコメントアウトして引用してみる。

||E| ① 労働は、……人間が自然とのその物質代謝を自身の行為によって媒介し、規制し、管理する一過程である。……彼は、自分の身体に属している自然諸力、腕や足、頭や手を運動させる。② 人間は、この運動によって、自分の外部の自然に働きかけて、それを変化させることにより、同時に自分自身の自然を変化させる。彼は、自分自身の自然のうちに眠っている諸力能を発達 entwickeln させ、その諸力の働きを自分自身の統御のうちに服させる。……われわれはここでは労働の最初の動物的、本能的な諸形態を問題としない。……③ 労働過程の終わりには、そのはじめに労働者の表象のなかにすでに現存していた、したがって観念的にすでに現存していた結果が出てくる。④ 彼は自然的なものの中に、彼の目的— 彼が知っており、彼の行動の仕方を法則として規定し、彼が自分の意志をそれに従属させなければならない彼の目的 — を実現する。……労働の全期間にわたって、労働する諸器官の緊張のほか、注意力として現われる合目的な意志が必要とされる。(Marx[1867] 193-4)

約言すれば①は「身体の制御」、②は「能力の発達」、③は「目的の先決」、④は「遂行の意志」の4項になる。もちろんこれらはコメントアウトで消えた文脈のなかで結びつけられている。たとえば、外的自然 Natur という意味と人間の本性 Natur というドイツ語の Natur の単名複義性を活用した②の修辞法や、ミツバチは蟻で巣を「建築する」が人間はそのまゝに頭のなかに「建築する」という自然言語の伸縮性を巧みに活かした③に関わる比喩表現によって説得力を与えられている。こうした自然言語のフィルタを外してしまうといかにも素っ気ないものになってしまうが、理論的推論の前提になる概念は、だれがどの言語で語ろうと変わらない、どの自然言語でも共通に定義できる一般性をもたなくてはならない。||E|のなかを探ってみたいのは、この一般概念である。

||E|の読み方は、全体を下線を引いた文で二つに区切り、①②は「労働の動物的、本能的形態」、③④が人間に固有の労働を論じた部分だとして、後半に考察を絞るのが標準的である。テキスト解釈としてはこの読み方は妥当であろう。ただ労働概念を再構築する観点からみると、①②は簡単に捨てきれない。熟練が射程に入る労働概念を組み立てるヒントがここに潜むからである。

■**身体**の制御 「媒介し、規制し、管理する」行為を一語で「制御」とよぶとすれば、①の基本はこの制御、すなわち意のままに身体をコントロールする行為である。この規定は、生理学的意味での「人間的労働力の支出」(Marx[1867] 61)とみる、剰余価値論での労働の捉え方からすでにズレを含んでいる。もちろん制御活動も身体の運動を伴うという意味では、力やエネルギーの「支出」という面をもつ。しかし、労働のコアをなすのは力の支出を制御する活動にあり、労働「力」は物理的な「動力」ではなく、それを制御する「能力」のほうだということになる。労働概念のうちに熟練の契機を内包させる一歩は、この制御能力にはじまる。

制御は制御する対象の存在を前提とする。では何を制御するのか。テキストを読むかぎり、その対象はもっぱら身体機能になっている。たしかに、この身体は「手や足」にかぎられない。情報を集め統合する目や耳といった感覚器官や、それを他者に伝える発話に必要な諸器官も含む。これは喋らぬ動物に対し、労働を人間に固有な行為と位置づけるうえで重要なポイントとなる。しかし、制御という観点からみると、ここには本来の対象が欠けている。労働手段の存在である。この欠落の理由は**||F|**を読めばわかる。

||F| 労働過程の単純な諸契機は、合目的な活動または労働そのもの、労働の対象、および労働の手段である。(Marx[1867] 193-4)

||F|は**||E|**の直後のパラグラフであり、**||E|**はこのうちの「労働そのもの」を先に論じたものということになる。そしてこの後、「労働対象」、「労働手段」にそれぞれ長い一パラグラフが費やされている。たしかに三者は単なる「要素」ではなく相関連した「契機」とされているが、「制御」の対象が労働手段であることは主題化されない。だれしも自分の身体なら自分がいちばんうまく操れる(と信じている)から、身体制御だけでは熟練の存在を意識することはない。身体のようにうまく操作できない道具を手にした瞬間、はじめて熟練の必要に気づく。手を動かすのに熟練はいらないが、金槌で釘を叩くにはそれなりの熟練がいる。その意味で**||F|**は、熟練なき労働を梓づけている。それゆえ熟練を内包する労働概念を再構築するには、**||E|**だけではなく、**||F|**の大枠から見なおす必要がある。

②の潜在的な能力の「発達」は、一層緊密に熟練と結びつく。**||C|**でみたように、熟練を天与の才ではなく、教育・養成によって形成されるものと捉えると、そこには「発達」という契機が必然的に含まれる。もし①と②を区別して読めば、②は、生得的素因を基礎に幼児のときから日々の生活を通じ身につけてきた①の身体制御能力ではなく、潜在能力を特定の労働「形態」に適合した技能に「発達」させることに相当する。4頁のGeschickとFertigkeitをここで想起すれば、①の身体制御はGeschickに、②の潜在能力の「発達」はFertigkeitにほぼ匹敵するのに気づく。さらにまた、まえにもふれたように、「熟練」という用語はでてこなくても「発達」のうちに、広い意味で熟練の契機を読みとることはできるのである。

■**目的の設定と遂行** **||E|**の①②に熟練の契機が内包されていることに私は長い間気づかずにきた。多くはきわめて陰伏的な示唆のためだが、気づきにくい一因は、つづく③④で人間労働の核心があまりに見事に描出されているせいでもあった。アダム・スミスは『国富論』の冒頭で、犬どおしが肉と骨を交換するのをみたことはないが、人間はだれでもふつうに交換しているのではないかと交換性向を印象づけた。マルクスも③で、ミツバチは正確な六角形を蜜蝋でつくるが、人間は頭のなかでそれを先につくれるのではないかと労働の合目的性を鮮やかに描きだす。いずれも人間の本性を洞察した卓抜した動物行動学的な挿絵といつてよい。

この鮮明な印象は、「動物の」に比して「人間の」という修飾句を冠しやすい熟練への関心を自ずと③の合目的な活動のほうに引き寄せる。こうして「人間に固有な合目的な活動には、何かしら熟練の要素が含まれているのではないか」と思いながら、③④を読むと結果は逆となる。熟練への関心を反射してしまうミラーが二枚、隠されている。この反射は鋭角的で「熟練なき労働こそ本来の労働だ」という単純労働仮説が跳ね返ってくるのである。

■手段の欠落 一つ目のミラーは、やはりここでも、引用||F|の枠組みに由来する労働手段の欠落である。「目的」の対をなす概念はなにか。「手段」である。ところが、③の目的設定と④の遂行の間には、本来あってしかるべき「手段」がない。いわば「100メートル先にゴールは設定した、あとは走るだけ」というかたちになっているのである。

しかし、頭のなかに表象した六角形は、合目的的に追求するにはあまりに脆く儂い。単なる表象では行動目標にはならないのである。そこでたとえば、紙に正確な六角形を書こうとすれば、描写の手順を考えなくてはならない。このとき一つの頂点から適当に描きはじめても、うまくゆかない。まず円を描き、中心を六等分する直線を引いて交点を結ぶといった設計的思考が必要となる。角材でこの形を組むには、角材を六等分し両端を60/120度に切りそろえなくてはならない。この角材を釘で結合するには、釘の種類や打ち方も工夫せねばならない。漠然とした目的を明確な仕様と実行可能な諸作業に落とし、どこからどの順に作業を進めるか、工程をプログラミングしなくてはならない。それには紙や鉛筆、あるいはコンピュータといった手段が必要となる。さらにこのような実装化は仕様の見なおしを伴う。それは、どうしても六角形でなくてはならないのか、釘打ちは斜めの力に弱い、もっと頑丈な四角ではダメなのかと、目的そのものの変更にも遡及することもある。目的の設定は実現の手順と連動している。「ゴールはきめた、あとは走るだけ、さあ走れ」という具合にはゆかない。③の目的設定は「表象」を実行可能な「手順」に具体化する、広い意味での「プログラミング」を伴うのである。

何種類もの労働手段を駆使することを考えれば、④の遂行もまた単純な身体活動をこえた要素を含む。身体器官の「緊張」や「注意力」の多くは労働手段を用いることで必要となる。たしかに、一方では金槌が釘を打ち込む過程では物理法則が支配する。手段をつかって対象にはたらきかける過程の基礎には、どんなに念じて「意志」の力で変えられぬ「固い過程」が潜んでいる。これは、自然法則でできる「自動的」な過程であり、労働手段はすべからず自動性を具え、そのかぎり「機械」の顔をもつ。

しかし、このモノ(=計測可能な対象)どうしの必然的過程の外側からは、「意志」の力がたしかに作用する。ただ、この場合も「意志」は直接作用するのではない。掌で釘を叩くのとわけが違う。手段を「操作」するのである。金槌の重いヘッドが釘を叩くとき、柄を振り上げた力のほかに重力も利用されるのであり、むやみに振り下ろしても無駄である。必要なのはヘッドが正確な角度と力で釘の頭を叩くよう、柄を操ることである。「緊張」や「注意力」は手段の「操作」が求めるものなのである。

要するにスタートとゴールの間には、多数の「手段」の体系があり、その存在は「設計」と「操作」を不可避とする。③の目的設定と④の遂行の間を埋めるべき「発達」した能力が必要なのである。労働手段を埋め込んだ労働過程を考えれば、「設計」や「操作」には熟練が必要だという答えが返ってくる。逆に、労働手段を消去した中空の労働過程に、安易に熟練論的関心でアクセスすれば、熟練なき労働こそ本来の労働だというメッセージが返ってくる。これが一枚目のミラーAである。

■他者の不在 二枚目のミラーはもう少し複雑である。熟練への関心を熟練なき労働に反転するには、||E|だけでは反射角が足りない。目的の設定と実行の分離を決定づける追加条件が必要となる。③④は、両者の分離の可能性を示唆しているだけで、ただちにその必然性を意味するわけではない。

実際、いくら合目的な活動だからといっても、自分一人でやるなら、だれもこんな面倒なことはしない。事前にすべて設計し、その通りにやるため注意力を払うなど、時間と労力の無駄である。漠然とした表象で作業をはじめ、不具合があれば逐次その場で微調整しながら目的に漸近するだろう。熟練の本質は、経験に基づけられた、この自由自在な調整能力にあると考えるほうがずっと自然である。

③の目的設定と④の実行の分離が必要になるのは、誰かと役割分担するときである。ところが、『資本論』の労働過程論は、目的意識的な活動を個別労働者の単独活動に閉じ込めようとする。

||G| われわれがその単純で抽象的な諸契機において叙述してきたような労働過程は、①諸使用価値を生産するための合目的活動であり、②人間の欲求を満たす自然的なものの取得であり、③人間と自然とのあいだにお

る物質代謝の一般的な条件であり、④人間生活の永遠の自然的条件であり、それゆえ⑤この生活のどの形態からも独立しており、むしろ人間生活のすべての社会形態に等しく共通なものである。それゆえ、われわれは、⑥労働者を他の労働者たちとの関係において叙述する必要がなかった。一方の側に人間とその労働、他方の側に自然とその素材があれば、それで十分であった。(Marx[1867] 198-9)

①から④までは生物個体が生存するための、ある意味自明な条件の列記である。これらは、人間生活の「社会形態」の必要条件であるのはたしかだが、十分条件ではない。ここから労働の基本概念は、労働者間の関係をぬきに叙述できるという結論はでてこない。労働概念のコアは、生命体レベルの必要条件に還元できない、人間労働の社会的性格にある。人間生活の「社会形態」が歴史的に異なる形態をとるのはたしかだが、それらすべての「社会形態」は、他の動物にみられない発達したコミュニケーション能力にもとづく社会的な労働を共通の基礎としている。これを加えてはじめて十分条件になるのであり、人間労働の基本概念は、他の労働者たちとの関係をぬきに規定できるものではない。

社会的労働の捨象は『資本論』の「労働過程」の決定的な疵である。「労働過程」は「協業」「分業とマニファクチュア」さらに「機械と大工業」を内包する一般概念に拡充されるべきだった。ところが『資本論』の章立てでは、「相対的剰余価値の概念」のもとに、これらが三つの章に分けられ、それぞれが独立の実現方式として、夥しい具体的事例とともに提示されている。たしかに各章のうちには、労働力の価値を低下させるための生産力上昇の諸方式という「相対的剰余価値の概念」の枠をやぶり、随所で組織的労働の基本原則が示唆されてはいる。しかし「労働過程」との連関は||G|によって切断され、表面上はみえないものに終わっている。

■構想と遂行の分離 ||G|の限定がそれほど根柢のあるものではないとすれば、少なくとも「他の労働者たちとの諸関係」を含めて||E|の③④を読む余地は広がる。H. ブレーヴァマンは『労働と独占資本』の冒頭で、③④を人間労働の本質は「構想と遂行の分離」にあると概括した。この書は「明確な話し言葉 articulate speech を使いこなす能力」(Braverman[1974] 48)を強調し「あるものが構想した観念を他のものが実行に移すことができる」(Braverman[1974] 51)点に人間労働の特質をみる。この「構想と遂行の分離」を出発点に、協業と分業一般の原理を明らかにし、資本主義のもとでそれが「労働の退化」degradation of work (Braverman[1974] 29)となって現れる歴史を描きだしている。原理にこだわる私とアプローチは正反対だが、資本主義の歴史的発展を捉えるベースとして、「労働過程」のみならず、「協業」、「分業」をも含む大きな枠組で『資本論』を読む姿勢には学ぶところが多い。熟練の問題を剰余価値論と整合的な複雑労働の還元問題に狭め、あるいは純粋な資本主義では単純労働を仮定すべきで熟練の問題は発展段階論の課題だと先送りする研究に比べれば、はるかに真つ当なアプローチである。

とはいえ接近方法の適否と結論の真偽は別である。『労働と独占資本』が返すメッセージは、一言でいえば熟練解体論である。||G|の制限条項を見なおし、「他の労働者との関係」を導入することで、たしかに「構想と遂行の分離」は可能性ではなく必然性となる。その結果、||E|の③④は、資本主義のもとでは熟練の解体が一貫して進むという強力なメッセージを返す二枚目のミラーBとなる。

しかし、この熟練解体論は、「構想と遂行の分離」の二重のゆがみによる。第一のゆがみは、「構想と遂行の分離」が媒介過程を欠く「分断」になっていることから生じる。「目的の設定と実現」の項で述べたように、構想は遂行の一手前まで具体化する熟練を要し、遂行も労働手段を適切に操作するための熟練を要する。すなわち、一つ目のミラーがここに埋め込まれているのである。第二のゆがみは、「構想と遂行の分離」を引きおこす他者の性格から生じる。『労働と独占資本』では構想と遂行は、労働主体相互のヨコのコミュニケーションとしてではなく、「ある者」one が構想した目的を「他の者」another が遂行できるというタテの方向性で結ばれている。資本主義のもとではこの「ある者」に資本家が代入され、「他の者」には賃金労働者が代入される。その結果、熟練は構想に回収され、事実上、構想が労務管理と一体化すると同時に、遂行は主体の判断の余地を狭められ不言実行の束に転化するのである。

以上みてきたように、『資本論』の「労働そのもの」は、「制御」や潜在能力の「発達」など熟練論への萌芽を宿しながら、「制御」の対象としての労働手段の欠落（ミラーA）と、労働主体間の相互関係の捨象（ミラーB）のために、逆に熟練論を排除する構成になっている。そこでつぎに、熟練への関心を反射してきた二重のミラーを撤去し、熟練を内包した新たな労働概念を組み立ててゆこう。

3 熟練を内包した労働

■労働の抽象概念 ここまで我慢して読んだ人は、『資本論』からの引用の仕方に違和感を覚えたかもしれない。それは、引用に際して自然言語による語りかけをコメントアウトし、できるだけ一般性をもつ言明のみを抽出しようと少し無理をしてきたせいである。ただおかげでなんとか、概念構成に必要な部材を拾い集め、多少磨きなおすこともできた。今度はこれらの部材をつかって、熟練を内包した労働の概念を組み立てなおす番となる。ここでも引き続き自然言語の修辞から距離をとり、オブジェクト指向のプログラミング言語なども参考に、形式的記述の可能性を追求してみる

||F||の「労働過程」という枠組みの見なおしが最初の課題となる。労働が目的を設定し遂行する行為である以上、それが「過程」となるのは自明なので、「労働過程」の代わりに「労働」を用い、用語の統一をはかる。さらに表記上の約束事を次のように定める。実例として存在する労働者Aの紡績労働やBの織布労働などと次元を異にする「労働なるもの」一般を指すときは、概念名を|| ||で囲み、||労働||と表記することにする。概念は、いくつかの属性と、それらの振るまい方で定義される。「属性」は概念名の後に:で区切り〔 〕で囲んで列記する。「振るまい方」はく > で囲み、:の後に定義を加えて概念名の下に列記する。振るまい方は諸属性を、4つの格助詞「が」「で」「を」「に」のみで結んだ抽象的な定義になっていることに留意されたい。概念名と振るまい方が区別しやすいように、各々の前にclass とdef をつけて表記すると、労働の概念はつぎのクラス定義となる。

```
class ||労働||:〔表象〕〔意志〕〔身体〕〔手段〕〔対象〕
  def <設計>:〔意志〕が〔表象〕を〔手順〕に
  def <制御>:〔意志〕が〔身体〕を
  def <操作>:〔制御〕で〔手段〕を
  def <遂行>:〔操作〕で〔対象〕を〔目的物〕
```

複数の属性を振るまい方で関連づけた対象をオブジェクトとよぶとすると、これは労働を一つのオブジェクトとして定義したことになる。「労働そのもの」を「労働過程」の一要素とする||F||のフラットな配列型の定義

$$\text{労働過程} = \{\text{労働そのもの}, \text{労働手段}, \text{労働対象}\}$$

と違い、関係を内包した諸属性の統合体として||労働||が捉えられているのがわかるはずである。オブジェクトという耳慣れぬ用語で強調したのは、属性（だけ）ではなく振るまい方のほうに重心をおいた概念化である。これは変容論全般に必要な発想となろう。

■設計と遂行 <設計>の存在は、六角形の表象を図面に落とし木枠をつくる過程を想起すれば推察できる。欲望の対象である〔表象〕（目的物のイメージ）を実行可能な〔手順〕に具体化する<設計>を明示することにより、徒競走型の「目的と遂行の分離」論がかかえていた欠陥は回避できる。初期化される〔表象〕と違い、〔手順〕は<設計>により内製される属性なので表記を若干変えてある。

プログラミングは<設計>の実例である。プログラムなしにコンピュータは作動しないが、コンピュータは、プログラム作成を補助できても、自らプログラムを書くことはできない。〔意志〕を欠くからである。コンピュータが「気を利かせて」コードを自ら修正して作動すれば、それはプログラムの「不具合」であり

コンピュータの「暴走^{オーバーラン}」とよばれる。コンピュータに許されるのは、せいぜい「ここを修正してよろしいですか」というメッセージをだすことまでである。〔表象〕を〔手順〕に具体化するのは〔意志〕であることを理解することが、自動化の限界を知るカギになる。

〈制御〉→〈操作〉→〈遂行〉の区別も、「モノとモノの反応過程」を外側からコントロールする||労働||の二層構造を理解するには必須である。属性の「関係」を表すことばは「が」「で」「を」「に」の四種類に絞られている。それらが何につくかは属性に応じてあらかじめきまっている。金槌で釘を打つことはできるが、釘で金槌を打つことはできない。これも〔意志〕の介在によるのであり、〔意志〕を捨象すれば金槌と釘の衝突という「モノとモノの反応過程」でしかない。〈制御〉→〈操作〉→〈遂行〉は、左端の自由な〔意志〕と、自然法則が支配する右端の「モノとモノの反応過程」が連鎖する||労働||の原構造を示す。

■協業と分業 つぎに「他の労働者との関係」を組み込んだ拡張を考えてみよう。||労働||はその属性に〔手段〕と〔対象〕を加えた段階で、実は「他の労働者との関係」を含んでいる。〔手段〕や〔対象〕は、他の||労働||の成果である可能性があり、これらの授受による間接的な連鎖関係をすでに許している。『資本論』の「労働過程」も「生産物の立場から考察するならば」(Marx[1867] 197)というかたちでこの連鎖の存在を示唆している。「分業」という用語こそ登場しないが、「生産物の立場」というのは事実上社会的分業と同義である。労働の成果であるモノを媒介とした無言の||労働||連鎖を「分業」と名づけ、||労働||と同じ名前空間に登録する。

しかし、労働の連鎖はこのスタイルにつきるわけではない。||G||の宣言は、分業と異なる「他の労働者たちとの関係」の存在を予想したものである。分業が労働の出口を通じた連鎖だとすれば、考えられるのは入口における連鎖、すなわち〔表象〕を〔手順〕として授受するスタイルの連鎖である。この〔手順〕の共有による||労働||の直接的連鎖を「協業」と名づけ、分業と同じ名前空間に登録する。

■コミュニケーションと労働 「協業」は広い意味のコミュニケーション活動によって成立する。この活動を支える二つの振るまい方を||労働||の概念に追加しておこう。

def 〈伝達〉:〔表象〕を〈設計〉で他の 労働 に
def 〈応答〉:〈設計〉で〔手順〕を他の 労働 に

実際のコミュニケーションはずっと複雑な過程であるが、ここで最低限必要なのは双方向性である。ポイントは〈伝達〉と〈応答〉が、同じボールのスロー & キャッチではない点である。キャッチボールをしているうちに、モヤモヤしたボールのかたちがしっかりしてくる。〈伝達〉と〈応答〉は〔表象〕から〔手順〕に向かう〈設計〉に重なるのである。六角形の木枠をつくる場合、六角形のイメージを渡すことから遂行可能な作業工程表まで、何段階かの〈伝達〉と〈応答〉を通じ、複数の||労働||の間で単一の〔手順〕が共有されるようになることで、結合され強化された単一の||労働||が新たに生成する。協力 cooperation を内包した労働の連鎖が「協業」である。

〈伝達〉と〈応答〉に関しては、次の点に注意する必要がある。〈伝達〉と〈応答〉の内容はかならず媒体を介して送られ、これはメディアを〔手段〕、^{コンテンツ}内容を〔対象〕とする〈遂行〉となる。頭に浮かんだ心像が直接相手に伝わることはない。何らかの伝達行為が不可欠となる。声という音声メディアであっても、一定の身体活動を伴う。紙に文字を記し図を描くにしても、電子媒体にのせるにしても、コミュニケーションは〔身体〕の〈制御〉と〔手段〕の〈操作〉という||労働||の原構造をそのベースに抱えている。

■労働の型 以上で||労働||の抽象概念は定義できたが、この||労働||一般がそのまま実行されるわけではない。この抽象概念を^{スーパークラス}親概念にもつ種々の労働が^{サブクラス}子概念として実行される。実行可能な労働は、すべて||労働||を継承し、属性のうち〔表象〕〔手段〕〔対象〕を特定のものに置き換えるかたちになる。親概念||労働||を継承した子概念を、||J||労働||と表記する。

たとえば〔手段〕 = {紡錘,糸車,...},〔対象〕 = {棉花,...},〔表象〕 = {綿糸} とすることで J = 手工業的

紡績 という子概念が発生し、〔手段〕 = {紡錘,紡績機,...}に変われば \mathcal{J} = 工場的紡績という異なる子概念が発生する。||労働||は、〔手段〕 = {金槌,...},〔対象〕 = {釘,角材, ...},〔表象〕 = {木杵}で置き換えることで、||木工|労働||に変容する。これは極度に単純化した例示にすぎず、複雑化することでいくらかでも現実に近づけられるが、ポイントはそこにはない。三つの属性の値をきめることで、さまざまなタイプの労働が、||労働||の子概念として統一的に説明できることさえ理解できればよい。このように子概念で実装されるタイプを労働の「型」とよぶ。|| \mathcal{J} |労働||は、それぞれ固有の〔型〕をもつ。

■熟練の概念 || \mathcal{J} |労働||が、それぞれ固有の〔型〕をもつことは、||労働||が「熟練」とよばれてきた何かを内包することでもある。この何かを概念化してみよう。

労働手段と切り離れた||E||の「労働そのもの」にはこの何かの宿る場はなかった。しかしオブジェクトとしての||労働||には〔身体〕の〈制御〉を通じて〔手段〕を〈操作〉する〈遂行〉という場が用意されている。さらに〈遂行〉だけではなく〈設計〉にもその宿る場は潜んでいる。〈設計〉は頭のなかで完結するわけではない。知覚できない表象を知覚できる姿態に引き出す必要がある。〈伝達〉された内容を〔対象〕として加工し、新たな媒体を〔手段〕として使い〈応答〉することで、共有可能な『手順』に組み上げることも求められる。

熟練なるものが必要となるのは、特定の〔手段〕を用いた媒介的・間接的な〔対象〕へのはたらきかけにおいてである。〔手段〕は、〈制御〉できる〔身体〕のように〔意志〕で自由にはならない。たしかに〔手段〕の一端は〔身体〕と結合しているが、他端は自然法則が支配する「モノとモノとの反応過程」である。金槌を空中で自由に振りまわせても、それだけで正確に釘が打ち込めるわけではない。〔身体〕〈制御〉の能力を〔資質〕とよび、〔手段〕〈操作〉の能力を『技能』とよぶ。この定義は、4頁で拾った部材 Geschick と Fertigkeit にほぼ対応する。||熟練||は〔資質〕と『技能』を属性とし、〔資質〕が『技能』に変わる〈発達〉と、〔資質〕を『技能』に変える〈養成〉を振るまい方としてもつ概念である。

```
class ||熟練||:〔資質〕『技能』
  def 〈発達〉:〔資質〕が『技能』に
  def 〈養成〉:〔資質〕を『技能』に
```

||熟練||は〔資質〕を引数に受けとって『技能』を戻り値に返す関数のように見え、「熟練」という用語は『技能』と同義につかえる場合も少なくない。それでも||熟練||を、結果としての『技能』に還元せず、〈発達〉と〈養成〉という並行的・相補的な振るまい方をもつ概念として規定する意義は少なくない。〈発達〉と〈養成〉は||熟練||を支える両足である。学ぶ気がなければ『技能』は身につかないが、何をどう学ぶかは習わねばわからない。

このように||熟練||を概念化すれば、熟練の「養成」を熟練の「生産」とよぶことの誤りもわかる。熟練は「労働そのもの」の外部で、それと独立に「生産」されるわけではない。いくら「身につける」といっても、技能と作業着は別物である。いわんや金槌を「生産」して労働者にもたせるのとはわけが違う。どんなに〈養成〉の側面が強くても、それは〔資質〕の〈発達〉を基底としており、外部から着脱できるものではないのである。

■型づけられた労働 ||労働||は||熟練||を属性に加えることで、特定の「型」を具えた|| \mathcal{J} |労働||となる。この結果、|| \mathcal{J} |労働||は、最終的に〔意志〕と〔身体〕、そして||熟練||のための〔資質〕という三つの属性を外部から受けとる概念となる。そこで、〔意志〕〔身体〕〔資質〕を属性にもつ労働||主体||という概念を定義してみる。

||主体||の実例として個別主体 A, B, C, \dots をとって考えてみると、各自の〔資質〕は異なる〔身体〕に過去の経験が刻まれ蓄積された能力であり、どのように計測してみても一致する保証はない。しかし注意しなくてはならないのは、バラバラの〔資質〕がそのまま|| \mathcal{J} |労働||において発揮されるわけではない点である。〔資質〕は||熟練||を通じて『技能』に変換されることではじめて機能する。『技能』は、個別主体ごとにバ

ラツキをもつ〔資質〕の諸要素の単なる寄せ集めではない。金槌で釘を打つのに必要なのは筋力だけではなく、打ち込む位置を聴き取り、精確な角度を定め、釘が曲がればやり直すといった総合的な能力であり、それは〔資質〕の諸要素の一部を抜きだし、新たに再統合することで創出される。〔資質〕 G_A, G_B, G_C, \dots は、〈発達〉と〈養成〉によって一つの『技能』 F^J にそろえられるのである。|| J |労働||がもつ型へ〔資質〕を整形することを「型づけ」とよぶ。

型づけには、資材や労力が必要となる。個別主体の資質は十人十色、したがって型づけの資材や労力の量も千差万別となる。単純労働に一定の「養成費」をかければ、特定の『技能』が「生産」されるわけではない。異なる経歴をもつ個別主体に対して一定のトレーニングを施せば、だれでも同じ『技能』が身につくというわけにはゆかない。資本主義経済のもとで労働力が商品として売買される段階を先取りすれば、型づけの経費は、この特殊な商品の販売に必要な経費として現れるが、商品の販売費用と同じく、その多寡によって価値の大きさが左右されるということはない。ただ現段階でまず注意すべきは、身につけるためのコストのバラツキを、身についた『技能』のバラツキと勘違いせぬことである。とくに資本主義経済のもとでは、「型づけ」に強力な定型化作用が加わる。最後に定型化の原理についてみておこう。

■分業による型づけ すでに述べたように ||労働||には他の ||労働|| と連繋する分業と協業という二つの原理が存在する。資本主義経済のベースとなる賃労働は、この連繋を大規模に加速することで、型づけられた労働の定型化を徹底したものにする。

分業による型づけの原理はすぐにわかる。労働手段は不特定多数の労働者が使用できるようにつくられている。それは自分の資質に合わせてつくられているわけではない。だから自分の資質のほうを標準化された手段に合わせなくてはならない。熟練は規格化された〔手段〕にピッタリ当てはまるよう、自分の〔資質〕を組みなおすことを意味する。たしかに、ゼロからすべて自分でつくるのであれば、自分の〔資質〕を百パーセント活かせる労働手段をつくることができるだろう。しかし、だれかがつくった備えつけの金槌を使うかぎり、どんなに筋力があろうと、それはヘッドの重量に制約される。

分業による型づけの原理は、労働手段を利用するのに最低限必要な『技能』に〔資質〕を合わせることとなる。むろん労働手段といっても一種類の金槌というわけではないが、ここでは原理を知るために思いきって単純化し、〔手段〕が要請する『技能』が $F^J = (5, 5, 5)$ で、個別主体Aの〔資質〕が $G_A = (10, 2, 5)$ であると仮定してみよう。この場合 G_A の10は過剰であり、逆に2は5まで引き上げねば、労働手段を適正につかうことはできない。金槌の性能に規定された(5, 5, 5)以上に能力を高めてもムダであり、どの〔資質〕もみな必要最低限の『技能』に定型化される。上方に凸凹があってもボトムラインがそろえばよい、これが分業による型づけの基本原理である。

■協業による型づけ 捉えにくいのは協業に起因する定型化である。ポイントは、いくら多数が集まっても各々が独立した作業をするのでは協業にはならない点にある。協力の効果を引き出すのに必要なのは、有機的な一体性である。この一体性は、①同じ瞬間に一斉に行動する集中の原理と②相手の行動の終了に合わせて自分の行動を開始する同期の原理の複雑な合成によってえられる。

もっとも簡単な事例であるバケツリレーで考えてみよう。12人が並んでバケツリレーをするとして、手渡しにかかる時間が1.0秒の者が3人、1.2秒の者が6人、1.4秒の者が3人いたと仮定する。この場合、バケツを端から端まで送るには何秒かかるか。12人の平均タイムの $1.2秒 \times 12人 = 14.4秒$ は誤答で、正解は最低能力に規定された $1.4 \times 12 = 16.8秒$ となる。化学反応における「律速」の原理であり、ボトルネックが全体を規定するのである。

ところが『資本論』は協業の効果に関して次のようにいう。

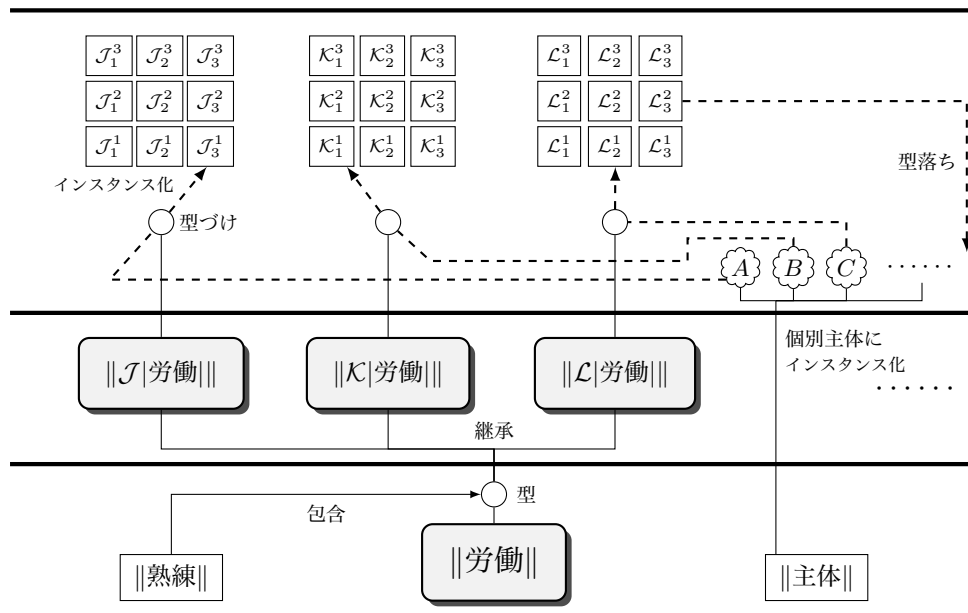
||H|| 12人のそれぞれの労働は、社会的平均労働から多かれ少なかれ背離しているかもしれず、それゆえ一人一人をとってみると、同じ作業に必要な時間がいくらか多かかったり少なかったりするかもしれない。にもかかわらず、各個人の労働日は、144時間の総労働日の12分の1として、社会的平均的な質をもつ。……12人を就業さ

せている資本家にとっては、労働日は、12人の総労働日として実存する。

『資本論』は、**H**にかぎらず、流通期間にせよ流通費用にせよ、あるいは平均利潤にせよ市場価値にせよ、バラついた現象に遭遇すると総計一致型の命題で対処しようとする。だが、この平均処理は根本的な難点をかかえている。たしかに加重平均を \bar{p} とすれば、 $p_1x_1 + p_2x_2 + \dots = \bar{p} \times (x_1 + x_2 + \dots)$ は事後的にはつねに成り立つ。しかし、だからといって \bar{p} が (p_1, p_2, \dots) のバラツキを規制しているとか変動の重心だということにはならない。バラツキを引きおこす背後の構造を分析すれば、多くの場合、最低や最高の値が規制力を発揮する関係が浮かびあがってくる。

バケツリレーで求められるのは、ボトルネックの1.4秒の個別主体の底上げであり、その他のメンバーがどんなにがんばっても16.8秒の壁は越えられない。バラついた〔資質〕を有する個別主体を結合し協業を実現するには、ボトムカットの定型化が必要となるのである。

■小括 「熟練」という用語の多義性をおそれ、些か形式的な記述に走りすぎたが、労働概念をゼロベースから組み立てることで「 $\|\text{労働}\|$ は $\|\text{熟練}\|$ によって均一化する」という命題を基礎づけることができた。抽象的な $\|\text{労働}\|$ は、①「型」を与えられ、②個別主体の〔資質〕を「型づける」ことで、知覚可能なこの世に、互換的な労働として現前し、労働の均一性は型変換の難易できまる。「熟練」を斬り捨て「具体的有用労働」を捨象することで、「抽象的人間労働」の彼岸に、知覚できない同質性を探求する還元論とは正反対のアプローチである。資本主義のもとで熟練は、生産技術の発展とともに多態化しながら労働の互換的均一性を実現してきた。熟練内包的な労働の一般概念を基礎に、熟練の変容 — とりわけ情報通信技術の発展とコンピュータサイエンスの深化のもとで今日急速に進む — の原理に迫ることが次の課題となる。



参考文献

- Böhm-Bawerk, Eugen von[1896], “Zum Abschlußdes Marxschen Systems”, in *Die Marx-Kritik der Österreichischen Schule der Nationalökonomie*, Etappen Bürgerlicher Marx-Kritik Band I, 1974, Verlag Andreas Achenbach
- Braverman, Harry[1974], *Labor and Mono-poly Capital : The Degradation of Work in Twentieth Century*, Monthly Review Press

- Hilferding, Rudolf[1904], “Böhm-Bawerks Marx-Kritik”, in *Die Marx-Kritik der Österreichischen Schule der Nationalökonomie*, a.a.O.
- Marx, Karl[1867], *Das Kapital* Buch I, in *Marx-Engels Werke* Band 23, 1962, Dietz Verlag
- 小幡道昭[2014] 『労働市場と景気循環：恐慌論批判』東京大学出版会
- 小幡道昭[2016] 「マルクス経済学を組み立てる」『経済学論集』（東京大学）80-3/4